

女子大学生の宗教的関心に関する研究

蔭 山 庄 司

はじめに

総理府統計局の調査によると、日本の宗教諸団体の信者数の統計は、約1億6700万人余にもものぼるといふ。この数は日本人の人口よりもはるかに多く、これだけを見れば日本人は非常に信仰厚い国民であると言えるかも知れない。しかし、何らかの宗教の信者として、社会的に登録されているか否かではなく、実際に個々の意識の中に宗教を持っているかどうかを問題とした場合には、私達日本人は上の数字とは全く反対の結果になるように思われる。最近の青少年を見た場合に、このことは特に痛感されよう。事実少し古いデータではあるが、牛島(資料11)が行なった青少年の意識の文化交差研究においても、日本の青少年は西欧の青少年と比べて、宗教には一貫して否定的あるいは無関心な態度を持っていることが示されている。彼らは、宗教を他の諸思想と同列に考え、神仏などは悩みの解決には何の役にも立たず、それらとは全く関係のない楽しい生活をしたいと思っている。また昨年(1974)のNHK世論調査(資7)でも、宗教的行動、信心のいずれの領域においても、年齢が若くなる程、宗教とのかかわり方が稀薄になっていることが明らかにされている。

これらの原因を葛谷(資5)は社会的・文化的要因の働きによるものであると考えた。西欧の家庭、学校、地域社会を通じて、幼い頃から一貫した宗教教育を施される青少年達と異なり、日本の青少年達の宗教とのかかわり合い方を支配するのは、彼らの家庭環境であるとの仮定のもとに、彼は両親の持つ宗教、信仰心と子供(大学生)のそれとの関連を調査し、両親共に宗教を持ち、信仰心の厚い家庭で育った大学生と、そうでない大学生との宗教的

態度の比較を行っているが、そこにははっきりとした差は見られなかった。次に行なった宗教的好悪の調査(資6)で、彼は青少年の宗教とのかかわり方には、先祖代々の宗教としての親密性と教義の優秀性の2つがあり、学生層では教義の優秀性の面から接近する者が多いことを明らかにしたが、同時にただ単に家庭内のコミュニケーションだけが宗教に大学生達の関心を引きつける原因とはなっていないことを知らせている。田中(資9)はこれをよりはっきりした形で明らかにした。彼女は、女子高校生、女子大学生を対象に個人面接を行い、学生の宗教意識に及ぼす社会的要因を調べたが、入信理由とその影響条件の分析から次のような考察を行なっている。そこでは入信の理由は年齢によって異なり、小中学校時代には、日曜学校などの環境的な既成事実が、中学・高校時代には、主体的な改心が、主な理由となっている。そして多くの場合に、家族、友人、教師、聖職者などとの具体的な人間関係による影響条件を伴っているとの推察が述べられている。

宗教的な関心を発達段階的、かつ社会的なネットワークの両方を媒介として把えようとした彼女の方向づけは興味深いが、残念ながらそこには具体的事実が余り示されておらず、その試みは必ずしも成功しているとは言い難い。しかし宗教に対する関心が、単に家族間のネットワークを通じて育まれるだけでなくその背景にはより広い社会的なネットワークがあり、またいつ宗教に関心を持つかによって、その影響を受ける相手が異なるのではないかという推測は当然検証されるべきものであろう。

これらのことから、本論文は、大学生の宗教に対する関心の違いが、社会的ネットワークの中で誰に、また、いつ影響されたかを、具体的に検討し、同時に、その関心の違いが彼らの宗教的態度、更には、価値観とどのようにかかわっているのかを調べようとするものである。

方 法

調査時期 1974年 1月

調査対象 甲南女子大学1年生 250名

調査内容 次に掲げる調査票によって質問紙調査を行った。なお、自由記

述による宗教意識度調査、更には、人格特性との関連を調べるためのパーソナリティ・テストも並行して実施しているが、これらについてはここでは触れないこととする。

宗教意識に関する調査

- I あなたは、現在宗教に対して、どの程度関心を持っていますか。（該当するもの1つを○でかこむ）

非常に ある	かなり ある	多少 ある	ほとんど ない	全然 ない	

- II 人の暮らし方にはいろいろありますが、次の中であなた自身の気持ちに最も近いのはどれですか。

1. 一生懸命に働いて金持になること。
2. 真面目に勉強して名を挙げること。
3. 金や名誉を考えず、自分の趣味にあった暮らし方をすること。
4. その日その日を呑気に、くよくよしないで暮すこと。
5. 世の中の不正を押しつけて、どこまでも清く正しく暮すこと。
6. 自分自身のことは考えずに、社会のためにすべてを捧げて暮すこと。

- III あなたは過去のこと、現在のこと、将来のことのどれを主に考えますか。

1. どちらかといえば自分の将来のこと。
2. どちらかといえば自分の現在のこと。
3. どちらかといえば自分の過去のこと。

- IV 次の項目に答えて下さい。（ハイかイエのどちらかを○でかこむ）

1. あなたは、神仏は実在するものと思いますか。（ハイ イイエ）
2. あなたは、あの世があると信じていますか。（ハイ イイエ）
3. あなたは、願ひ事は神仏によってかなえられると思いますか。
(ハイ イイエ)
4. あなたは、病気や傷は神仏に祈るとなおると思いますか。

(ハイ イイエ)

5.あなたは、お寺や教会にお参りしますか。 (ハイ イイエ)

V あなたは、人間の本性についてどのように思いますか。次の中から選びなさい。

- 1.人間は、生れながらに善である。
- 2.人間は、生れながらに悪である。
- 3.人間は、生れながらに善でもあり、悪でもある。
- 4.人間は、生れながらに善でもなく、悪でもない。

VI あなたの宗教心（神や仏に対する関心）に影響を与えた人達は次の中の誰ですか。幼児・小学校時代、中学校・高校時代のそれぞれについて、影響を与えた人にはその欄に○をつけなさい。

与えた人	時期	
	幼児期・小学校時代	中学校・高校時代
(1) 父 母		
(2) 兄 姉		
(3) 祖 父 母		
(4) 親 族		
(5) 友 人		
(6) 教 師		
(7) 僧侶・牧師 (専門家)		

(それぞれ該当する各時期の欄に○をつけること)

結 果 と 考 察

1. 被調査者 250名を宗教に対する関心の強さによって、非常に関心がある、多少関心がある、関心がないの3つのグループに分けたところ（注）、それぞれ48名（19.2%）、77名（30.8%）、125名（50.0%）であった。このような関心の強さに違いをもたらした背景的要因、すなわち、発達段階上の時期と、宗教についての考え方に影響を与えた相手に関して、グループ別に集計したのが、表1である。この表から、まず、幼児・小学校時代と中学

校・高等学校時代の各々の時期に影響を与えた人の数を見ると、非常に関心があると答えた人達では、1人あたり平均1.23人から2.00人へ、また多少関心があると答えた人達は同じく、平均1.51人から1.79人へと、共にその相手が誰であるかを問わないで単純に数だけ調べても各時期1人以上の影響を受け、時期が進むことによってその数も増えている。他方関心なしと答えた人達においては、幼児・小学校時代には1人あたり平均1.18人であったのが、中学校・高校時代には、平均0.92人とむしろ影響を与えた人の数は減少している。このことから、宗教に対して関心を抱くか否かは、発達段階的に見るといわゆる思春期すなわち人生に対し、考え、悩む中学校・高校時代なのではないかと思われる。このことは自分の周りに影響を与える者がいても、受け手の方が、それを受ける構えを持っている必要があることを示している。

宗教に対する関心の強さの違いと、各時期における相手との影響、関係に

表1 関心の強さで分けられた、宗教に対する考え方に影響を与えた相手とその時期

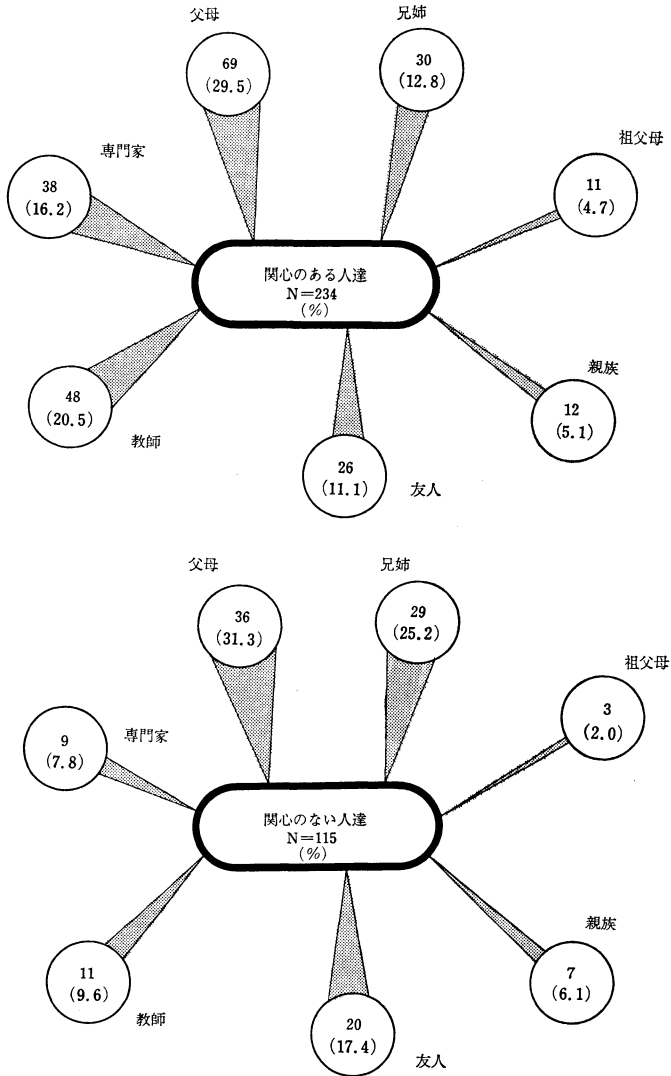
関心の強さの時期	相手	父	兄	祖	親	友	教	専	合計(%)	平均
		母	姉	父母	族	人	師	門家		
非常に関心あり (N=48)	幼児・小学校	27 (45.8)	14 (23.7)	1 (1.7)	3 (5.1)	2 (3.4)	5 (8.5)	7 (11.9)	59 (100.1)	1.23
	中・高校	26 (27.1)	11 (11.5)	5 (5.2)	3 (3.1)	14 (14.6)	24 (25.0)	13 (13.5)	96 (100.0)	2.00
多少関心あり (N=77)	幼児・小学校	45 (38.8)	28 (24.1)	3 (2.6)	6 (5.2)	7 (6.0)	10 (8.6)	17 (14.6)	116 (99.9)	1.51
	中・高校	43 (31.2)	19 (13.8)	6 (4.3)	9 (6.5)	12 (8.7)	24 (17.4)	25 (18.1)	138 (100.0)	1.79
関心なし (N=125)	幼児・小学校	45 (30.4)	45 (30.4)	2 (1.4)	4 (2.7)	20 (13.5)	18 (12.2)	14 (9.5)	148 (100.1)	1.18
	中・高校	36 (31.3)	29 (25.2)	3 (2.6)	7 (6.1)	20 (17.4)	11 (9.6)	9 (7.8)	115 (100.0)	0.92

目を向けると、このことは更に明らかになる。まず、幼児・小学校時代について、3グループ間の比較を χ^2 検定によって行ったところ、それぞれのグループで影響を与えた相手の占める位置には有意な差が見られなかった ($\chi^2=16.37$, $df=12$; *n.s.*)。

この結果から、幼児・小学校時代においては、宗教に対する考え方に影響を与える人は決まった人達であることがわかる。データからはいわゆる核家族(父母・兄姉)内からの影響が、全体のほぼ60%と大きなウェイトを占めていることが知られる。これはこの時期に特徴的なことであり、彼らにとって一般に自分達との関係の深い目上の情報知識源は家族であることを考えると、この結果は当然であるといえるが、祖父母の影響が表1にあげられた人達の中では、もっとも少ないことは興味深い。本来宗教活動には熱心である筈の祖父母が、主要な影響者として挙げられていないということは、受け手の側に十分な構えのない時期にはいくら多くの宗教的活動を見たり、聞いたりしても、その人から影響を受けることはないということを示している。あるいはまた、これは核家族化に伴う祖父母との別居が多少原因となっているのかもしれない。

次に、中学校・高校時代ではどうであろうか。同じ様に、 χ^2 検定を行なった結果は、関心の強さによって選んだ相手に違いが見られた ($\chi^2=26.01$, $df=12$; $P<.025$)。

この差を個々のグループ間の組合せについて調べてみると、非常に関心ありと答えた者たちと多少関心ありと答えた者達との間には、有意な差はなく ($\chi^2=6.01$, $df=6$; *n.s.*)、この2グループと関心なしと答えたグループの間の差はそれぞれ有意であった。(非常に関心ありから、関心なし: $\chi^2=16.86$, $df=6$; $P<.01$, 多少関心ありから関心なし: $\chi^2=18.60$, $df=6$; $P<.01$)。従って非常に関心ありと答えた者と、多少関心ありと答えた者をまとめて関心ある者のグループとし、関心のない者達からなるグループとの比較を行ってみた。この2つのグループの違いは、図1に示されている。この図からも判るように父母の影響は、幼児・小学校時代同様両グループとも約30%と相



$\chi^2=22.60, df=12; P<.01$

図1. 中学校・高校時代に宗教への考え方に影響を与えた人。

変わらず高いが、兄姉の影響をみると、宗教に関心がある人達は12.8%と4番目の位置にあるのが、関心ない人達では2位になっていて、幼児・小校時代と違ってはいない。一般にこの時期の対人的なつき合いは、血縁的な家族を中心としたネットワークよりも、学校を中心とした家族外のネットワークの中で行なわれることが多い。それにもかかわらずこの様な結果が表われたのは、宗教というものの特徴であるのか、あるいは女子学生という母集団によるものかは、このデータから明らかにすることはできない。しかし少なくとも宗教に対して関心がないと答えた人達は、発達段階的に見た場合に、時期の推移にもかかわらず、影響を受ける相手が変わっていないということは表1からも明らかであろう。また一方、関心がある人達について見れば、教師と専門家がかなり重要な位置を占めている。専門家の方は当然の結果であるともいえるが、教師が高い影響を与える相手として出てきたのはなぜであろうか。すなわち幼児・小学校時代には宗教に関して教師の影響力は余り見られず、また、中学校・高校時代になっても関心のない人達の間ではそれは変わっていないにもかかわらず、関心のある人達の中で中学校・高校時代に教師がこれだけ高い割合を占めたということは、どういう訳であろうか。それは教師が生徒の抱く思春期特有の悩みや相談事に対して彼自身の力で解決しようとはせず、宗教という方向に生徒の目を向けさせることによって解決することがかなり多いのではないかと推察できよう。また友人の占める割合が比較的少ないのは、宗教のもつ特殊性であろう。宗教に対して関心のない人達の間では友人の影響が強く働いていることから見れば、友人は宗教への接触を逆に阻げるような働きをしていることがわかる。

2. 宗教に対して関心のある人達と関心のない人達との間には、宗教的な態度に当然、差があると思われるが果してどうであろうか。宗教的態度の心理的な意味に関しては、Glock, C.Y. (1962) による概念的な枠組み、更には因子分析による意味づけなどがあるが(資2)、筆者は宗教に関する態度を構成するものの中で次の3つの次元が重要であると考える。

(1) イデオロギーの次元 ・神の存在を信じる。

- 人生の意味を知ろうとする。
- (2) 用具性の次元(功利性) • 精神的 • 物質的な利益を得る。
- (3) 慣習 • 儀式の次元 • 参拝する。
- 冠婚葬祭。

この分類自体が今後の実証を必要とするものではあるが、ここではこの3つの次元の各々について質問を行ない、宗教に対して関心のある者とないない者の違いを調べてみた。質問はすべてハイとイエのどちらかで答えるように作られている。まずイデオロギーの次元として「神は存在すると思うか」という問題に答えてもらったが、 χ^2 検定の結果は有意であり ($\chi^2=14.54, df=1; P<.01$)、この次元については関心のある者の方がより神の存在を信じていることがわかった。(表2)

表2 神は存在するか

回答		関心度		計
		関心がある	関心がない	
ハ	イ	71	41	112
イ	イエ	54	84	138

表3 願い事はかなうか

回答		関心度		計
		関心がある	関心がない	
ハ	イ	65	29	94
イ	イエ	60	96	156

用具性の次元からは、「願い事は祈れば、かなえられるか。」という問を行ったが、これも χ^2 検定の結果は有意であり ($\chi^2=22.08, df=1; P<.01$)、この次元についても2つのグループの間には差が見られた。(表3)

表4 お参りに行くか

回答		関心度		計
		関心がある	関心がない	
ハ	イ	96	64	160
イ	イエ	29	61	90

第3の、慣習、儀式に関する「寺や教会に参るか。」という問についても同様の処理を行ったが、ここでも有意な差 ($\chi^2=17.71, df=1; P<.01$)が見られた。(表4)

これらの結果は、宗教に対して関心を持っている者と関心のない者とは宗教的な態度においては差があることを示している。

3、次に彼らの理想とする暮し方、生き方あるいは人間の本性についての考えなどでも、差が見られるかどうかを調べた。これは態度というよりもむ

しろ彼らの価値観についての問題である。暮らし方については、「あなたの気持ちに最も近い暮らし方は。」という問に対して、6つの選択肢を予め用意し、その中の1つを選択させた。調査表のⅡにあるようにその選択肢は、

- (1) 金持になること。
- (2) 名を挙げること。
- (3) 趣味にあった暮らし方をすること。
- (4) 呑気にくよくよしないで暮すこと。
- (5) 清く正しく暮すこと。
- (6) 社会のために身を捧げること。

の6つであったが、結果の処理の際には、金銭・名誉、趣味・平凡、清潔・奉仕という3カテゴリーに再分類した。(表5)第1は、「社会の中で自分の勢力を高めようとする傾向」第2は、「社会と離れて自分本位に生きて行こうとする傾向」第3は、「社会のためすなわち他人のために生きようとする傾向」を示しているとして行ったものである。 χ^2 検定を行ったが有意な差は見られず($\chi^2=1.11$, $df=2$; $n.s.$), この結果は宗教に対する関心の違いが、必ずしも大学生達の理想とする生き方に違いをもたらしてはいないことを示している。次に生き方について、自分達の生き方が過去を中心とするか、現在を中心とするかまたは未来を中心とするかのいずれであるかをたずねた。

表5 理想とする暮らし方との関係

暮らし方 \ 関心度	関心がある	関心がない	計
金銭・名誉	5	5	10
趣味・平凡	108	113	221
清潔・奉仕	10	6	16
無答	2	1	3

表6 自分の生き方

生き方 \ 関心度	関心がある	関心がない	計
未来指向	73	76	149
現在指向	41	38	79
過去指向	11	11	22

表7 人間の本性は何か

本性 \ 暮らし方	関心がある	関心がない	計
性善説	36	32	68
性悪説	12	13	25
性善・性悪説	48	55	103
なし	23	25	48
無答	6	0	6

(表6) この結果も理想とする生活同様有意ではなく($\chi^2=0.18$, $df=2$; *n.s.*), 従って宗教に対する関心の有無によって大学生達の生き方に違いがあるということはみられなかった。また人間の本性については、性善説、性悪説、性善・性悪説、どちらでもないの4カテゴリーについて答えてもらったが、(表7) ここでも有意な差は見られなかった ($\chi^2=0.62$, $df=4$; *n.s.*)。

これらの結果からは次のことが明らかになる。すなわち宗教に対して関心があるかないかは、宗教自身と結びついている宗教的諸態度とは関係しているが、いわゆる人生観、人間の本性などについての考え方、すなわち態度の上部に位置する価値意識とは関係していない。そしてこのことは今の青少年達の宗教との結びつきが、かなり表面的なものでしかなく、より本質的な理解に基づいているとは言い難いと思われるのである。

注)

調査1の質問票5分類では各グループの数の大小に偏りがあり、そのまま考察を行なうのは無理であると思われたので、非常に関心がある、かなり関心があるの2グループと、ほとんど関心がない、全然関心がないの2グループを各々1つにまとめて全体を3分類して、結果の処理を行っている。

要 約

女子大学生 250名を対象に、発達段階と社会的ネットワークの両面から、彼女達の宗教的関心に違いをもたらした背景的要因を検討し、同時に現在の宗教的関心の違いと、宗教的態度及び価値観との関係を調べた。その結果、幼小の頃両者の間にはどちらも家族の影響が強く、差は見られないが、中学校・高校時代になると社会的なネットワークに違いが見られ、特に宗教に関心のある者は教師、専門家の影響が強く、関心のない者は友人の影響をより多く受けていることが明らかになった。また、その違いは宗教的態度にも表われたが、理想とする生き方、暮らしなどの価値観においての差は見られなかった。

参 考 文 献

- 1) Ditt, J.E. : Psychology of Religion. In Lindzey and Aronson (Ed.). The Handbook of Social Psychology vol. 5. Addison Wesley. 1969, pp. 602—659.
- 2) Glock, C.Y. : On the study of religious commitment. Religious Educ., Res. Suppl., S—98—S—110, 1962.
- 3) 石田正次：日本人の宗教観，生活のなかの宗教，日本人と宗教，「日本人の国民性」至誠堂，1970，pp. 182—193.
- 4) 小助川次雄：宗教的関心の社会心理学的研究，年報社会心理学第6号，1965.
- 5) 葛谷隆正：大学生の宗教的態度とその背景的要因について，熊本大学教育学部紀要 13, 1965, pp. 81—87.
- 6) 葛谷隆正：学生層と成人層との宗教的好悪に関する比較研究，熊本大学教育学部紀要 14, 1966, pp. 96—103.
- 7) 日本放送協会放送世論調査所編：日本人の意識—NHK世論調査，至誠堂，1974.
- 8) 西平重喜：宗教についての見解，宗教的感情，態度，宗教的概念とその国際比較，「第2日本人の国民性」至誠堂，1970，pp. 48—64.
- 9) 田中弘子：女子青年期の生き方と宗教的関心との関係に関する社会心理学的研究，教育社会心理学研究，6. 1967, pp. 195—211.
- 10) 鳥山平三：青年期における宗教への態度と価値観，日本心理学会第33回論文集，1969, pp. 354.
- 11) 牛島義友：西欧と日本の人間形成，金子書房，1964, pp. 326—332.